

槐

かい

岡井省二創刊

平成15年11月号

平成十五年十一月一日発行 第十三巻第十一号 通巻第一四九号（毎月一回）一日発行
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



もう一つ

高橋将夫

白地着て心に湧いてきたるもの
おしなべて土用芝居でありにけり
何も言はずに木耳のふえてをる
風穴に出入り自由の百足かな

緑陰やインターネット検索中

千畳の岩畳踏む素足かな

蚕豆ではちきれさうな袋かな

夢殿に吹くまつさらな夏の風

炎天の一転風神雷神凶

追悼の曼陀羅華かつ曼陀羅華

もう一つあと一つ枇杷剥いてをる

赤 蜻 蛉

秋 岡 朝 子

錢 亀 を 流 さ ぬ や う に 水 を 替 ふ
父 の 日 の 靴 を 磨 い て を り に け り
眠 る 薬 に ほ の ぼ の 明 か し 合 歡 の 花
星 の 竹 色 紙 の こ よ り 切 れ ん と す
羽 を 閉 づ ご と 噴 水 の 止 り け り
汗 た ら し と ま と の ご と き 顔 な ら ぶ
青 簾 赤 子 に 大 き 目 が ふ た つ
広 島 や 夾 竹 桃 は 白 が 佳 し
母 死 な し め し 夕 顔 の 開 き け り
原 爆 忌 ひ た す ら 石 で ゐ る 小 石

特別作品

足跡に海水滲む祭前
秋蟬や耳の中にも日の射して
友の忌や日かげに乾くきりぎりす
夕ぐれの空を見上ぐる羽抜鶏
秋澄むや岡井省二の下駄の音
昼の闇桔梗の開く音すなり
風軽くなりてカンナの花やぶれ
何もなき空をたのしみ赤蜻蛉
秋の夜の撫でよと猫の鳴く声よ
落葉の夜風が帯解く音を出し

槐安集

市場基巳

岩上の仏に夏日遠くあり
草にさへ夕日の深さにいにい蟬
露虫とあやまりにゆくすすき道
寺猫の窺ひながら涼みをり
りんりんと鳴き響みるは山蟬か

水野恒彦

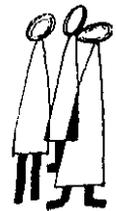
八月の馬身より濃き山のいろ
蓮咲いて畳まれてある縄梯子
野分後の竹藪灰の匂ひかな
みな乾く磧石なり魂祭り
波音の空より聞こゆ展墓かな

石脇みはる

土山の土に触れたる素足かな
立秋の小間物店に入りにつけり
鬼灯と折箱ひとつ貰ひけり
蒲の穂にありし日ざしのいま山に
ことばすくなくに蓮根を洗ひをり

竹内悦子

朝焼の青いちじくの畑かな
鉄瓶を持ちて蓮の実蓮の花
サンガラス赤蒟蒻を並べあり
打ち水の地の底にある宇宙かな
日の匂ひ残りし夜具や鱧祭



木下野生

風やんでしまひ八月六日なり
墓洗ふうしろを通り乳母車
生身魂少しく口のもつれゐて
送り火のまへに来てをり女の子
施餓鬼寺小さな雨になつてゐる

中島陽華

烏骨鶏鳴き夕暮の岐阜提灯
この年の朝顔の空サキノホン
赤の飯手窪にしてや夏神楽
大河黄色なり命日の心太
残る歯の一本も無し大花火

延広禎一

ががんぼの脚置去りに海の方
夏霧に吸い込まれける祝詞かな
両の手にべく盃や阿波しじら
佛手柑影絵の魔法使べく盃に六の受盃をかな
流れ藻は潮の裳裾よ鳥渡る

栗栖恵通子

星祭紫紺の羅紗をひろげをる
まいまいに鼻の頭の脂かな
重陽の夢虫に節ありにける
満月や飾包丁入れてをり
寸釘に月のさしをる裏鬼門

加藤みき

流星や木霊人魂中の空
ふつくらと瑠璃いろなりき秋の蠅
鬼の子のなかなか強き衣かな
臭木の実どこかに星の爆けをり
一筋のしろがねの道秋の蛇

大島翠木

をととひは秋立つ魚田崩しをり
鳴き砂の浜満開のすべりひゆ
朱雀なるつくつく法師終りけり
近づける火星に夏大根提げて
月光の箒木並ぶ中をゆく

槐市集

岩下芳子

阿耨多羅鯨と犀と省二の忌
羽拔鶏三步あゆみてもの忘れ
近く来よ敷居の外法師蟬
二の腕に我慢の漢秋胡瓜
出風^{だしかぜ}や蕊のかげ濃き白芙蓉

植木戴子

南瓜のくびれ洗ふてをりにけり
大甕の黒酢の音の涼しかる
くちびるの塩からきこと桐一葉
あをあをと毬栗落ちる山の晴
学校の静かなりけり百日紅

植松美根子

零歳も百歳もぬし青いちぢく
首太きスポーツ選手鶏頭花
夏草にペダル足ををはじかれし
国境のお花畑と湖と
ひまはりの丈に埋まるポストかな

宇田喜美栄

日の当たる川に沿い来し石叩
日雷ひとりとなりて海をみる
邯鄲ややうこそ大火星燃ゆ
蓼科山に雲低う這ふ男郎花
桔梗の雨滴を溜めしあしたかな



槐集

高橋将夫選

蟬しぐれのいつせいに止む空の穴 枚方 中野京子

天地を叩く男の祭打鼓

山肌を夏霧のぼり死者生者

天と地をむすぶ炎の祭かな

ときじくの風に声あり青葉木菟

優曇華やはるかにかすむ象頭山 香川 黒田咲子

黒日傘象頭人身像 拝む

送り火の明けて長虫流れ着く

大文字舞子の待つは人力車

がちやがちやの暮色必死に迫りくる

浜木綿や生木づくりの死出の門 奈良 瀬川公馨

近衛兵の衿を正せり曼陀羅華

停泊の船の間ぞ浮いて来い

朝焼けや紳士淑女のぞろぞろと

伊と仏の天井川が国境

白き夜の海より来たりロゼワイン 枚方 雨村敏子

舞殿や眉の上なる天の川

開盃展鉢皿の上なる神馬藻ほんたわら

鬼灯の破れし殻のうらおもて

太陽がいつまでもあり金魚玉

鬼灯の揺れつつかろき音すなり 近藤きくえ

大江山に消えてゆきたる赤とんぼ

阿修羅みて秋夕焼けの中に佇つ

盃蘭盆や水音足音に耳さどく

まだ青き縞鳥瓜ミサのこゑ

静けさの嵐の中にをりしかな 京都 竹中一花

迫り来る風音秋の夜明かな

水は水産みて濁るや秋の川

一陣の二陣の壬生の野分かな

苦瓜の眠り重ねし太さかな

銀河往來 高橋將夫

―ロジックとレトリック―

柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺

子規

なぜへ柿食うて居れば鐘鳴る法隆寺」としなかつたのかという碧梧桐の評に対して、子規が「もつともではあるが、そうすると句法が弱くなると思う」と述べた話（『病床六尺』）はよく知られている。確かに、「柿を食う」と「鐘が鳴る」とこの間に因果関係はないから、「柿食へば鐘が鳴る」というのは論理的におかしい。それを承知の上でこの句は評価されている。

「柿を食ったから鐘が鳴った」と本気で考える者はないだろうが、鐘の鳴るタイミングがよすぎて、いかにも「食ったから鳴った」ような気がしてこないでもない。そう考えてみると、むしろ、「柿を食う」という行為と「鐘が鳴る」という現象の結びつきがロジックとして成立しないところに、この句の不思議なよろしさを感ずる。因果関係のない行為と現象との結合、これはまさに一つのレトリック（修辞法）といえよう。

雲一つなくて蓮の実飛とびにけり

將夫

雲がなかったから蓮の実が飛んだわけではない。でも、案内晴れていたから飛んだのかもしれない。ならば、蓮の実に聞いてみますか。

ちなみに、接続助詞の「て」は、単に先行する内容を受けるに留まる場合のほか、「状態、作用」笑って答える、「並列、対等」（硬くて強い）、「反復、継続」（書いて書いて）等とその用法は広く、「原因、結果」に限られない。

山肌を夏霧のぼり死者生者 中野 京子
霧が晴れると、下界は生と死の世界。霧が晴れると、そこには山に挑戦する者と山に眠る者の世界が…。

送り火の明けて長虫流れ着く 黒田 咲子
長虫は蛇。きれいごばかりで済まない現実の側面。

浜木綿や生木づくりの死出の門 瀬川 公馨
超新星爆発による星の死と新星の誕生。死と生木の門。刹那永劫、永劫刹那。浜木綿の香がやすらぎ。

太陽がいつまでもあり金魚玉 雨村 敏子
暑さがひしひしと伝わる。金魚玉になにかホツとする安らぎと懐かしさを覚える。

大江山に消えてゆきたる赤とんぼ 近藤きくえ
京都府の大江山の景。童謡と御伽草子の世界の重なるところが俳諧。

苦瓜の眠り重ねし太さかな 竹中 一花
苦瓜の豊かな生育は、眠りを重ねたせいでしたか。

みぞおちに汗六道の辻にをる 谷口佳世子
六道の辻となると、みぞおちの汗は単に暑さだけによるものではないように思えてくる。

(以下略)